

あさひのプロジェクト 学びの軌跡

研究者 牧島 司 小林 輝紀 村田 茜 佐々木 清花
 富田 武 木内 浩司 中村 満

1 あさひのプロジェクト（総合的な学習の時間）の研究テーマ

自分の可能性や価値を認識し、社会に生かそうとする意欲を高める学習の在り方

2 単元名・学年 「社会の中で生きる私」・2～3年 ※2学年は9月より合流

3 単元の目標

自分のやりたいことと、自分自身の特徴を基に決めた「社会貢献」に向けた追究テーマを地域や企業の方と関わりながら計画・実践していく探究的な学習を通して、自己の生き方に対する考えを深めていくには、他者や社会との関わりが必要であることを理解し、実践から得たことを自己の生き方と関わらせて考えるとともに、自己の将来を切り拓いていこうとする。

※『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 中学校 総合的な学習の時間』によると、総合的な学習の時間の目標は、「内容のまとまり」を基に、総括的に目標を示すとともに、資質・能力の三つの柱を構造的に配列し、単元の目標としているため、本校他教科の学習指導案の単元の目標とは異なる表記をしている。

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	新たな価値を創造できる資質・能力
知 自己の生き方に対する考えを深めていくには、他者や社会との関わりが必要であることを理解している。 技 実践に関する調査を、適切な方法で実施している。	思 これまでの学習や ① 自分自身の特徴、実践に関わる調査活動などで収集した情報を基に、実践計画を立てている。 思 収集した情報を整理しながら、課題の ② 解決に向けて考えている。	態 自分で設定した課題の ① 解決に向けて、見通しをもって取り組もうとしている。 態 課題の解決に向けて、 ② 他者の意見や考えを尊重しながら、協働して取り組もうとしている。 態 自己の将来に向けて、 ③ 目指す生き方を明確にしている。	新 実生活・実社会の諸課題から自ら課題を見つけ、デザイン思考を用いて課題の解決に向けて取り組んでいる。 新 課題を多角的に捉え、自らの知識や技能を総合的に働かせて、粘り強く取り組んでいる。 新 仲間と協働し、互いのよさを認識し、積極的に社会参画しようとしている。

5 あさひのプロジェクトにおける全校研究テーマに迫るための重点2の手立て

- ・実生活・実社会の諸課題に対して、社会や本物（人、もの、こと）と関わりながら自分と社会との関係や自らの役割を考え、「デザイン思考」を活用して解決策を見だし、自分にできる実践（小さな実践）を通して、課題解決を図る活動を位置付ける。

6 単元に寄せた教材化

(1) 単元展開（単元のデザイン）について

単元の導入では、社会貢献をテーマに生徒の「やってみたい！」を具現化し、主体的に探究活動を始められるように、#（ハッシュタグ）によるチーム分け（図1）を行った。ここでは、実生活・実社会の諸課題に対して、生徒が「やりたい活動」と関わりそうな

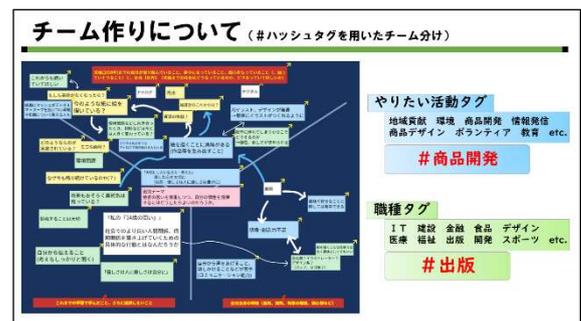


図1 #（ハッシュタグ）によるチーム分け

「職種」について、生徒の記述を基に教師が関連する#を決め出し、生徒が一番近いと思う#を選び、同じ#を選んだ生徒同士で集まり、活動の検討を繰り返し行う場を位置付けた。こうすることで、活動内容の見通しがより具体的になり、計 36 の活動が提案された。続いて、生徒の提案者が立ち上げた 36 活動《プロジェクト型》と企業からの提案された 5 活動《ミッション型》の一覧を生徒に提示し、参加したいチームを選択する場を位置付けた。ここでは、人数が少なく似た活動を考えているチームを一つにまとめたり、人数が多い 1 チームを均等に分けたりすることで、1 チームの人数が 4～6 人程度となるようにした。そうすることで、一人一人のよさを生かし、それぞれが役割をもって協働して活動することができると思った。

また、生徒が、地域や企業などの実社会に関わりながら課題解決に向けて探究を進めていくために、本校では、以下のような機会を年間行事に位置付けている。

【探究の日】	年間 8 回程度、校外活動などの探究を進めていく時間を確保するために、午後の日課をすべて総合的な学習の時間に充て、課題解決に取り組む時間と定めた。
【ヒューマン・ウィーク】 (以後、H・W と表記する)	本校が行っている総合的な学習の時間のカリキュラムの一つで、校外活動などの探究を進めていく時間を確保するために、7月の約一週間（令和 5 年度は 4 日間）をすべて総合的な学習の時間に充て、課題解決に取り組む時間と定めた。
【東京研修旅行】 ※ 3 学年のみ実施	「あさひのプロジェクト」の活動を充実させるために、H・W の後半 2 日間を東京研修旅行の時間に充て、東京にて企業訪問や実施調査する時間と定めた。
【成果発表会】 ※ 探究の日に実施	年間 3 回程度、自分たちの活動の意義や目的を客観的に確認するために、探究の日を成果発表会に充て、異学年の生徒や保護者、地域・企業の方々と活動についての情報交換する時間と定めた。

以上のようにチームを編成し、実社会に関わりながら活動することで、教科アプローチ、プリアプローチで育成した三つの社会人基礎力を発揮したり、育成したりすることに繋がると考える。(表 1)

表 1 あさひのプロジェクトの活動で発揮・育成される社会人基礎力

活動	社会人基礎力
実生活・実社会の諸課題といった正解のない問いに向き合い、デザイン思考を用いて様々な解決策を発想・創造し、実践を伴って解決を試みること。	「考え抜く力」
探究の日を中心に各チームで計画を立てて企業や地域を訪問したり、教科の学習だけでは実施が難しいイベントの企画運営や、開発した製品を企業や地域に提案したりすること。	「前に踏み出す力」
地域や企業と関わる中で、立場の違いによる多角的な見方や考え方があることを理解したり、決め出した解決策をチームメンバーそれぞれの個性を生かしながら実践したりすること。	「チームで働く力」

(2) 本單元における「デザイン思考」や「小さな実践（アウトプット）」の捉え

展開場面では、デザイン思考を用いて、小さな実践（アウトプット）を繰り返すことで課題解決を図る（p 3 表 2）。ステップ 1～5 の過程を振り返り、改善点を基に必要な段階から再考し、小さな実践を繰り返す。このようにすることで、各教科等領域で身に付けた資質・能力や社会人基礎力を、実生活・実社会の諸課題の解決に活用しな

がら、教科横断的な視点で探究したり、実生活・実社会の中で自らの役割や価値を見いだしたりすることができると思った。

表2 デザイン思考の各段階における生徒のプロジェクト活動の一例

段階	各段階における生徒の活動
ステップ1 共感・理解	・環境問題に対して、関係する市役所の部署を訪問し、聞き取り調査を行ったり、地域の実地調査をしたりするを通して、地域の環境問題への情報を集める。
ステップ2 問題定義	・集めた情報を整理・分析し、地域の環境問題を解決するために、何に焦点を当てて活動を組み立てればよいか決め出す。
ステップ3 発想・創造	・環境問題の解決に向けて、社会から求められること（ニーズ）と、チームの個々がもつ強みや技能等を照らし合わせながら解決策出し合う。
ステップ4 試行	・すぐに実行可能な解決策を基に、問題解決の仮説を立案し、検証方法を含めた実践の計画を立てる。
小さな実践 (アウトプット)	・チーム内で決め出した解決策を実践する。 ・成果発表会
ステップ5 検証	・仮説を立てて実際に実践（アウトプット）を行った後、実践の準備（目的や条件設定）、実践中（観察や記録方法）、実践後（対象の評価やアンケート結果等）を検証する。

(3) 本単元と「目指す生徒の姿」とのかかわりについて

年間3回程度の成果発表会では、デザイン思考で行ってきた探究の過程を振り返り、自分たちの成果に加えて、実生活・実社会と自分たちのつながり、活動の手応えとやりがい、思い知らされた現実等について発表する。このような場を位置付けることで、自分たちの活動を成果の面だけで振り返るだけではなく、自分の力で現実の社会に関わってきたことを捉え直し、自分と実社会との関係や役割について認識し、自分の学んできたことを社会貢献に生かすことができることを実感できると考えた。

7 単元展開（3学年のみ、4～12月の活動内容） 全50時間扱い 本時は第38～39時

段階	【学校行事等】 ※背景の色は、デザイン思考の各段階に対応している 学習活動	時間
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・「あさひのプロジェクト」のガイダンスを聞き、活動のイメージをもつ。 ・2学年の社会体験活動を振り返り、自分の過去（学んだこと）、現在（自分の特徴）、未来（15年後の社会）について、Yチャートを用いて分析し、大切にしたい生き方・考え方を再考すると共に追究テーマを決め出す。 ・若狭高等学校海洋科学科の探究活動「サバ缶を宇宙食にしよう」の動画を視聴し、自分にできる探究活動を通して地域に貢献することのイメージをもつ。 ・実生活・実社会の諸課題に対して、「やりたい活動」と「関わりそうな企業」に該当するハッシュタグ（#）を選択する。 	1 5
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ#の人でグループをつくり、お互いのもつ社会貢献に対する考えを聞き合うと共に、それぞれが考える活動のアイデアを共有し、活動の具現化に向けて模索する。グループのメンバーを変えて2回行い、具体的にやってみたい活動を提案する人（提案者）を募る。 	6 7
開	<ul style="list-style-type: none"> ・【探究の日①】※ここまでは学年共通の活動 ・提案者の活動（プロジェクト）と企業からのミッション※の一覧を基に、探究チームを選択し、集まったメンバーで活動の提案書について検討する。 ※ミッションに関しては職員が事前に企業と打ち合わせを行い生徒に紹介する。 	8 9

	※ここからチーム毎の探究活動		
	《プロジェクト型》 ・提案書の活動の対象、目的についてどこで、どのように確認すればよいのか検討する。 ・東京研修旅行での調査目的と調査場所	《ミッション型》 ・企業の方と顔合わせを行い企業側の求めていることについて確認すると共に、提案書の内容について検討する。 ・訪問先について検討する。	10 ～ 13
	【探究の日②】		
	・地域や企業に出向き、提案書について社会的ニーズと合致するのか確認したり、問題の当事者に話を聞いたりとして情報を収集する。	・企業の方に情報を提供してもらい、課題解決に向けて、潜在的なニーズがどこにあるのか検討し、その調査方法について検討する。	
	<ul style="list-style-type: none"> これまでの情報を整理し、解決したい問題の決め出しを行う。また、具体的な解決策を考える上でさらに必要な情報がないか確認する。 H・Wに向けて学校での活動計画と、東京研修旅行の実地調査や企業訪問の行動細案を含めた計画書を作成する。 		14 ～ 17
	【H・W】		
	<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて再度地域や企業に出向き、必要な情報を収集する。 定義された問題解決に必要な要素と、チームの個々がもつ強みや技能等を整理し、具体的な解決策を決め出す。 成果発表会①に、これまで活動と今後の展望をスライドにまとめる。 		18 ～ 28
	【東京研修旅行】		
	<ul style="list-style-type: none"> 都市部の企業訪問や実地調査を行い、実社会の諸課題に悩む現状や、それらの課題に対応する方法の具体例を学び、問題解決に必要な情報を収集する。 東京研修旅行の調査結果をまとめ、成果発表会①の資料を完成させる。 		
	【成果発表会①】		
	<ul style="list-style-type: none"> 1・2年生や保護者に向けて、活動開始から2か月間の学びを説明し、活動目的や今後の見通しに関して客観的な意見を募る。 解決策の実践に向けて、問題解決の仮説を立案し、検証方法を含めた計画書や作品の設計図等を「試作」する。 		29 ・ 30
	【探究の日③】 ※各チームの進捗状況に応じて内容が異なる。 《プロジェクト型》例：ザリガニチーム		31 ～ 36
	<ul style="list-style-type: none"> ザリガニの殻の粉末を用いて、チョークの試作品づくりを行う。 試作したチョークについて、硬さ、折れにくさ、書き心地等について、ザリガニの粉を含まない場合や市販品と比較し、ザリガニの殻の粉の粒子の大きさや配合具合について検証する。 		37
	【探究の日④】 ※本時		
	<ul style="list-style-type: none"> 検証結果の情報を整理し、結果に影響を及ぼした要因について考察する。そして、変更する条件（ザリガニの粉の粒子の大きさや、配合具合など）を検討し、新たな仮説を設定して次の試作品づくりを行う。 これまで行ってきた試行を基に改善した活動を計画したり、ステップ1～3の必要な場面に戻って情報を整理して新たな解決策の計画を立てたりする。 		38 ・ 39
	【探究の日⑤】 【探究の日⑥】		
	<ul style="list-style-type: none"> 活動の集大成として実生活・実社会の諸課題に対して、現時点で最善の解決策を実践し、結果を検証する。 成果発表会②に向けてこれまでの活動についてまとめ、1月以降の活動を2年生に引き継ぐ準備を行う。 		40 ～ 47
	【成果発表会②】		48
終末	<ul style="list-style-type: none"> 1年生や保護者、企業の方に向けて、活動開始からこれまでの学び（行ったこと、手応え、やりがい、思い知らされた現実等）、活動の評価、今後の展望を説明し、2年生に活動を引き継ぐ。 ※以後2年生のみで3月まで活動する 		49 ・ 50

8 生徒の学びの実際（第1～36時まで）

※背景の色は、デザイン思考の各段階に対応している

【学校行事等】 時間	《プロジェクト型》 通称：ザリガニチーム	《ミッション型》 通称：長電チーム
第6時 ・ 第7時	◆以下の活動内容とハッシュタグで、チームメンバーを募った。	
	＜チーム名＞	
	ザリガニバスターズ	長野電鉄沿線魅力発信
	＜活動内容＞	
	廃棄されるものを有効利用して環境保護を行う。	長野電鉄と沿線の魅力を発信し、より多くの人に利用してもらおう。
	＜関係するハッシュタグ＞	
#地域貢献 #環境問題 #商品開発 #ものづくり #科学 #生物	#地域貢献 #運輸 #観光 #環境問題 #経済問題 #イベント #運営	
【探究の日①】 第8時 ・ 第9時	◆集まったチームで、以下の①～③の項目で提案書を作成した。	
	① 誰のために行う活動なのか・どういったニーズに対する活動なのか	
	<ul style="list-style-type: none"> 特定外来生物を駆除したり、産業廃棄物（卵の殻）を減らしたりすることで生態系の保全など環境問題の解決につなげる。 生物や廃棄物を活用できる商品として有効活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 長野電鉄の利用者だけでなく、長野電鉄沿線の地域住民、観光業に携わる人に魅力を発信し、より多くの人に長野電鉄を利用してもらおうことで、地域のインフラ環境を守っていくこと。
	② 社会の諸課題を解決するためには、どのような問題があるのか。	
	<ul style="list-style-type: none"> ザリガニが近隣の農作物や生態系に対してどの程度悪影響を及ぼしているのか。 ザリガニの殻からチョークができるのか。 	<ul style="list-style-type: none"> 小学生など若年層の電車離れが進み、関心が低くほとんど利用しない人がいること。 観光客、愛好家に地域の魅力が十分に伝わっていない。
③ ②で設定した問題を解決するために、どのような地域・社会と協働し、どのような活動をすればよいのか。		
<ul style="list-style-type: none"> 市役所に相談し、外来生物の環境に与える影響や有効利用の方法について調査する。 チョーク工場に訪問し、教えてもらった方法を基に、ザリガニの殻でチョークを試作する。 	<ul style="list-style-type: none"> 長野電鉄の方に近年の乗降調査のデータ基に利用者層の動向を聞いて現状を把握する。 利用者にインタビューを行い、長野電鉄に求めるサービスの内容を把握する。 	
【探究の日②】 第12時 ・ 第13時	 <p>図2 長野市役所の訪問</p>	 <p>図3 長野電鉄の方との懇談</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 市役所（環境保全温暖化対策課）に訪問し、長野市の外来生物に関する問題を教えてもらい、問題が起きてからではなく、事前に対応していくことが大切であることを学んだ。 	<ul style="list-style-type: none"> 長野電鉄の方と懇談を行い、地域路線の抱える課題の現状や、コロナ禍前後の利用者の状況について教えてもらい、利用者増に向けた具体的な解決策について意見を交換した。

<p>【H・W前半】 第18時 ～ 第22時</p>	 <p>図4 ザリガニを捕獲する様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校近隣でザリガニが大量発生している場所を調査地に選定し、網や罟を用いて捕獲したザリガニを茹でて殻を取り出した。 	 <p>図5 利用者インタビューの様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 長野駅、須坂駅、湯田中駅に分かれて、利用者の年齢や利用目的、今後向上させて欲しいサービスについてインタビュー調査を行った。
<p>【東京研修旅行】 第23時 ～ 第28時</p>	 <p>図6 日本理科学工業（株）訪問の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> チョーク工場を訪問し、チョーク作り体験を行うとともに、材料を提供してもらい、ザリガニの殻を用いてチョーク製作への助言をもらった。 	 <p>図7 東急電鉄実地調査の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 首都近辺で通勤や観光で利用者の多い沿線を調査し、それぞれの利用者に向けたサービスやホームの現状について調査した。
<p>【成果発表会①】 第29時 ・ 第30時</p>	 <p>図8 ザリガニマスターズの発表の様子</p>	 <p>図9 長電チームの発表の様子</p>
<p>【探究の日③】 第35時 ・ 第36時</p>	 <p>図10 チョークの試作品づくりの様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 工場訪問の際に教えてもらった工程と配合で、ザリガニの殻を含むチョークの試作を行った。乾燥前の段階から想像以上に殻の大きさが大きいことが分かり、殻の粉碎方法に課題が残った。 	 <p>図11 中学生の企画書を検討する様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 11月に実施予定の鉄道イベントについて企画書を提出し、長野電鉄の担当の方より助言をいただいた。企業側に行ってもらった内容が多いことの指摘を受け、自分たちだけでできる活動を増やすことに課題が残った。
<p>【探究の日④】 本時（第38・39時）</p>		